# 高機能 ASD 児の情動認知における顔情報の影響

—定型発達児との比較から—

衛藤　萌[1]・酒井佐枝子[1]・山本知加[2]・辰巳愛香[2]・毛利育子[1]・谷池雅子[1]
([1]大阪大学大学院連合小児発達学研究科・[2]大阪大学大学院連合小児発達学研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター)

**【目的】**

人の顔からの情報は、他者の気持ちの読み取りにおいて欠かせない要素である。これまでの研究で、自閉症スペクトラム障害(ASD)児は、表情から正確に感情を読み取ることが困難であることや、情動判断において表情へ視線向ける頻度が定型発達児よりも少ないことが指摘されている(Baron-Cohen, Tager-Flusberg, & Cohen, 1993; Corden, Silvers & Skuse, 2008)。一般的に、人は情動認知において表情の情報をより重視する傾向があると言われており、ASD 児、特に高機能 ASD 児が日常で抱えている他者感情の理解の難しさなどの背景にはこの表情認知の困難さがあると考えられる。そこで、本研究では、他者の表情が見えている場合と見えていない場合で、高機能 ASD 児の情動の読み取りに差異が生じるかどうかを検討することで、高機能 ASD 児が情動判断の際にどの程度顔情報を重視しているかを検討することを目的とした。

**【方法】**

**対象者**　大阪大学医学部附属病院で ASD と診断された IQ75 以上の ASD 児 17 名(男児 16 名、女児 1 名；平均年齢 9.4±1.3 歳)、比較対象群として、通常学級に在籍し、発達の問題および神経疾患に既往歴がない定型発達(TD) 児 26 名(男児 14 名、女児 10 名；平均年齢 9.8±1.3 歳)を対象とした。

**情動認知課題**　情動的場面の情動認知において、表情の情報をどの程度効果的に利用できるかを見るために、Movie Stills task (Adolphs & Tranel , 2003)を使用した。映画の一場面の静止画 16 枚を PC 上の画面に提示し、同じ刺激について、表情を隠した場合(Without Face)と表情を隠していない場合(With Face)の 2 条件について、それぞれ登場人物にあてはまる感情を 7 つの感情語(Happy, Surprise, Sad, Angry, Afraid, Disgust, Neutral)の中から 1 つ選択するよう求めた。全ての刺激は、複数の視覚的手がかり(例えば、動作、対人的位置、表情など)を含む、複雑な社会的/情動的場面を用いた。得点が高いほど社会的/情動的場面に対する情動認知がより適切であることを示すものである。

**質問紙**　自閉症様特性についての尺度として、養育者に Autism Screening Questionnaire(ASQ)日本語版(大六 他, 2004)への回答を求めた。

**【結果と考察】**

全ての TD 児における ASQ 得点はカットオフ得点 13 点未満であった($M$ = 3.1, $SD$ = 2.8)。The Movie Stills Task の得点を算出後、群(高機能 ASD,TD)×条件(With face, Without face)×感情(Happy, Surprise, Sad, Angry, Afraid)の 3 要因の混合分散分析を実施した。その結果、群および感情の主効果($F$ (1,41) =16.35, $p$ < .01; $F$ (4, 164) =22.58, $p$ < .01)、群×感情の一次の交互作用($F$ (4, 164) =6.01, $p$ < .01)が確認された。多重比較を行った結果、Without face 条件において Happy、Sad 感情を示す刺激に対する得点、With face 条件においても Sad 感情刺激の得点が高機能 ASD 群は TD 群よりも有意に低い結果を示していた。With face 条件の Happy 感情刺激については、全ての TD 児が全問正答を示しており天井効果が見られた。これらの結果から、高機能 ASD 児は、表情が見える、見えないにかかわらず、特に Sad 感情を示す場面の認知が TD 児に比べて困難であることが示唆される。条件間での差異については、高機能 ASD 児、TD 児どちらにおいても確認されなかった。

本研究結果では、高機能 ASD 児の情動認知において、顔情報がもたらす影響は見られなかった。しかし、定型発達児においても顔情報がある場合もない場合も情動認知の程度にほとんど差異がなく、この年齢の児童には情動認知において顔情報があまり重視されていない可能性が考えられる。情動認知の発達は、児童期から思春期、青年期を通して発達し続けると言われている(Vicari et al., 2000; Thomas et al., 2007)。今後、思春期以降の対象についても検討を行い、どの発達段階で表情が重視されるようになるのかを明らかにすることが必要である。一方、高機能 ASD 児は、Sad 感情における情動認知については、定型発達児に比べて難しいことが確認された。Golan(2008)は、高機能 ASD 児は定型発達児に比べ、複数の情報を統合して情動判断をすることが困難であることを指摘している。本研究においても、特に Sad 感情について、複数の刺激を統合して捉えることの困難さが示唆される結果となった。